

## 事業実績書

事業名	地域の高齢者が安心して暮らしていける場をみんなで考え作っていく事業	
場所	沼津市 今沢 地内	
期間	平成 28 年 7 月 12 日 ~ 平成 29 年 3 月 31 日	
	日程	実施項目・作業項目
事業 内 容	H28. 8. 6	<p><b>本年度の活動についてのNPOスタッフの打ち合わせ</b></p> <p><b>実施場所：</b>NPO法人事務所</p> <p><b>参加人数：</b>10名</p> <p><b>実施内容：</b>活動、日程についてNPOスタッフで確認し、役割分担を行う。</p>
	H28. 9. 10	<p><b>ユマニチュード入門コース研修会についての打ち合わせと検討</b></p> <p>(ユマニチュードについての日本におけるエージェントであるデジタルセンセーションの藤城氏と電話及びメールでのやり取り)</p> <p><b>内容：</b>ユマニチュードの普及を図り、沼津を含め静岡県の介護医療の現場における認知症ケアの充実を目指すために、認知症ケアの技法・ユマニチュードの指導者を招いた入門コース沼津研修会を企画し、その実施をデジタルセンセーション・藤城氏に依頼した。藤城氏からは、研修会実施の条件として、参加対象者が介護・医療の専門職に限定されること、参加人数は1回につき100人以上であること、参加料金は一人につき35,000円前後であること、今年度内の実施可能な時期は3月下旬であること等を提示される。介護施設、医療施設関係者から意見をいただいた上で、法人内で検討した結果、この条件では今年度は実施することが難しいと判断し、ユマニチュード入門コース沼津研修会の今年度実施を断念した。</p>
	H28. 9. 30	<p><b>聞き書きワークショップの開催</b></p> <p><b>実施場所：</b>ブラサヴェルデ4階403会議室</p> <p><b>参加対象：</b>介護・医療の専門職、他関心のある一般の方</p> <p><b>参加人数：</b>36名(参加予定人数 37名) 参加率97%</p> <p>* 沼津市を中心として、静岡市および東京、神奈川等関東からも参加。</p> <p><b>実施内容：</b>介護現場における利用者とスタッフとの関係性を深めていくためのツールである聞き書きについての講義と、5~6名のグループワークによる聞き書きの体験ワークショップを行った。グループワークでは、聞き書きによるかるた作りを体験してもらった。</p> <p>1対1の閉ざされた対話ではなく、その場の参加者全員を巻き込んだオープンな対話による共同作業で聞き書きをし、その内容を知るに表現していくことを体験しながら、福祉現場における利用者とスタッフといった関係性を越えた人と人としての向き合い方について、みんなで議論した。</p>

	<p>また、終了後に同施設内カフェにて交流会を行い、20名が参加。聞き書きや各現場で直面している課題についての情報交換や意見交換を行い、交流を深めた。</p> <p>本ワークショップのアンケートでは、「講義とグループワークがあり、とてもわかりやすかった」「聞き書きからコミュニケーションが広がるのを感じた」等の好意的な感想をいただいた。</p> <p>*参考資料：聞き書きワークショップチラシ、「聞き書きワークショップ・報告」、「聞き書きワークショップ・アンケート集計結果」</p>
H28. 11. 26	<p><b>認知症フォーラム「認知症当事者の声から私たちが学ぶこと」に向けての富士宮市訪問、ゲストとの打ち合わせ（富士宮）</b></p> <p><b>実施場所：</b>富士宮市役所</p> <p><b>参加人数：</b>2名</p> <p><b>実施内容：</b>平成29年3月の認知症フォーラムに向け、ゲストとして予定している富士宮市役所の稲垣康次氏と面談し、認知症当事者とともに地域づくりをしている「富士宮モデル」についてお話をうかがうとともに、フォーラムの進め方について打ち合わせを行った。</p>
H28. 12. 22	<p><b>認知症の人と共に生きる地域づくりの実践をしている「富士宮モデル」の視察に向けての事前視察</b></p> <p><b>実施場所：</b>富士宮市黒田地区及び杉田地区</p> <p><b>参加対象者：</b>法人スタッフ、活動への協力者</p> <p><b>参加人数：</b>3名</p> <p><b>実施内容：</b>富士宮市役所の稲垣康次氏に紹介して頂いた、黒田よりあいサロン（黒田地区）と、若年性認知症の方の就労場所である木工房「いつでも夢を」（杉田地区）を訪問、見学し、参加者と対話するとともに、3月の視察についての依頼と打ち合わせを行った。</p>
H28. 12. 25	<p><b>認知症フォーラム「認知症当事者の声から私たちが学ぶこと」に向けての東京訪問、ゲストとの打ち合わせ</b></p> <p><b>実施場所：</b>東京都中央区築地の朝日浜離宮ホール</p> <p><b>参加人数：</b>2名</p> <p><b>実施内容：</b>平成29年3月の認知症フォーラムに向け、認知症当事者と家族、介護・医療者等が集うレビーフォーラム2016に参加し、関係者と意見交換を行うとともに、3月のゲストとして予定しているレビー小体病当事者の樋口直美氏と面談し、フォーラムの進め方について打ち合わせを行った。</p>
H29. 1 上旬～	<p><b>認知症フォーラム「認知症当事者の声から私たちが学ぶこと」の募集開始</b></p> <p><b>実施内容：</b>チラシの作成、チラシの配布、関連団体や登録メンバーへのチラシの発送、広報ぬまづへの情報掲載、法人ホームページの公開、SNSを通しての宣伝を行った。</p> <p><b>募集方法：</b>電話、ファックス、メール</p> <p><b>人員配置：</b>法人スタッフで、チラシデザイン、印刷会社への依頼、チラシ配布、発送、ホームページ作成、受付等を手分けして行った。</p>

<p>H29.1 上旬～</p>	<p><b>認知症フォーラムに向けて、認知症の方をめぐる介護・医療現場や地域での体験談やご意見を募集</b></p> <p><b>実施内容：</b>介護・医療現場や地域において認知症当事者や家族が置かれた状況についてこれまであまり声に挙げられていなかったが、認知症フォーラム開催をきっかけに、それぞれがそれぞれの立場で声を挙げ、それをまとめることで、今この地域において認知症をめぐる何が問題なのかを明らかにし、認知症の方にとっても住みやすい地域を作っていくための手がかりとする。集まったアンケートは資料としてまとめ、当日参加者に配布し、フォーラム後半での議論にも使用した。</p> <p><b>募集対象者：</b>フォーラム申し込み者他、認知症に関わる方に対して広く募集。</p> <p><b>募集方法：</b>フォーラム申し込み者にアンケート用紙を送付。法人ホームページでアンケート記入欄を掲載し、SNSで募集を呼び掛ける。裾野市認知症家族の会、長泉町認知症家族の会へ趣旨を説明し、アンケートの用紙を送付。連携機関として、中今沢結いの会、訪問看護ステーション春、コスモスケアサービス、エリシオン沼津、社会福祉法人春風会、社会福祉法人信愛会の担当者に面談して趣旨を説明し、賛同をいただいた上で、アンケート収集の依頼を行った。その他、法人スタッフが、中今沢地区の認知症当事者へと直接面談し、アンケートを依頼した。</p> <p><b>募集結果：</b>認知症当事者、家族、介護・医療関係者、地域住民等から、52件のアンケートの回答があった。</p> <p>*参考資料：認知症フォーラムでの配布資料「認知症の方をめぐる介護・医療現場や地域での体験談やご意見」</p>
<p>H29.1.20</p>	<p><b>中今沢結いの会での認知症研修の開催及び、世田谷における空家を活用した居場所づくり見学についての報告と中今沢における空家活用についての話し合い</b></p> <p><b>実施場所：</b>中今沢公民館</p> <p><b>参加対象：</b>中今沢結いの会のメンバー、その他の中今沢地域住民</p> <p><b>実施内容：</b>認知症の人とともに生きる地域づくりのための啓蒙として、NPOスタッフから認知症の当事者をめぐる様々な動きについての情報・資料（主に講師である樋口直美氏と上野秀樹氏の著書や連載からの資料）の提供を行いながら、地域住民とともに認知症についての勉強会を行った。3月のフォーラムへの事前勉強会でもある。</p> <p>また、後半では、10月12日にぬまづの宝推進課主催で、空家を活用した居場所づくりの先進的な取みを進めている世田谷区を法人理事長・村松と理事・六車が訪問し、4件の事例を見学したので、それについての報告を法人側からするとともに、今後の中今沢における空家活用についての見通しについて結いの会のメンバーと話し合った。</p> <p>法人側からは、世田谷の事例はいずれも興味深いものだったが、空家所有者自らが運営していたり、あるいは他者に運営を任せている場合にも、所有者に福祉や居場所づくりへの活用の意思あり、無料か低料金で空家を提供している事例であったこと、そして、中今沢で空家を活用した居場所づくりをする場合も、やはり所有者にそのような提供の意思がなければ、継続的に運営していくのは難しいのではないかと報告した。</p> <p>それに対して、結いの会メンバーからは、中今沢でも空家は増えてきているが、所有者は遠方に居住する子供たちである場合が多く、中今沢住民とも疎遠であるので、居</p>

H29. 3. 4

場所づくりに無料や低料金で提供してくれそうなどころはないという情報提供があった。更に、空家ではないが、結いの会のメンバーであり、80歳を過ぎて独り暮らしをしている稲葉氏の自宅の1階と3階が使われていないので、稲葉氏が居住のまま居場所として活用することはできないか、という提案がされた。

稲葉氏本人及びご家族も希望されているということなので、今後、稲葉邸を住み開きの形で居場所として活用していけるかどうか検討していくこととなる。

### 認知症フォーラム「認知症当事者の声から私たちが学ぶことー誰もが生きやすい社会を目指してー」

**実施場所：**沼津市立図書館4階視聴覚ホール

**講師：**樋口直美氏（レビー小体病当事者）、稲垣康次氏（NPO法人認知症フレンドシップクラブ富士宮事務局）、笠間睦氏（榊原白鳳病院診療情報部長、脳神経外科認知症専門医） \*講師を依頼していた上野秀樹氏が体調不良により欠席されたため、代わりに笠間睦氏が急遽登壇して下さることになった。

**参加対象：**認知症当事者、家族、介護・医療専門職、他一般の方

**参加人数：**170名（参加予定者:186名） 参加率：91%

\*沼津市内を中心に、静岡県東部地区他、東京、大阪からも参加。

**実施内容：**前半は、3人の講師に、それぞれ20分程度で、ご自身の活動内容や認知症についての考えを述べていただいた。樋口氏は、「認知症」とひとくりにされることで起きる弊害や差別について、更に、レビー小体型認知症における症状としての幻覚や自律神経障害、薬剤過敏症などについて自分の経験から話をされた。稲垣氏は、若年性認知症当事者である佐野光孝さんをめぐって、本人中心に、行政、地域住民、専門職が連携し話し合いをしながら、本人が生きやすい場を作っていった経緯や、「支援する」という立場ではなく、共に生きる「パートナー」として認知症の方と対話を続けることが重要であることを話された。笠間氏は、医療現場における認知症の告知では、「希望」とともに伝えることが大切であること、終末期医療について本人の意思を確認できる事前指示書を作成しておくことが、本人にとっても家族にとってもよりよい終末期を迎えるために必要不可欠であることが話された。

後半は、六車が司会進行となって、3人のゲストとともに、事前に集めた「認知症の方をめぐる介護・医療現場や地域における体験談・意見」のアンケートの資料（当日配布）をもとに、医療現場や介護現場で「おかしい」と言えるようにするためにはどうしたらよいか、また、認知症の本人も介護する家族も共に幸せになるためにはどうしたらよいかといったテーマについて議論した。

フォーラムについてのアンケートでは、「講師の持ち時間が20分では短いと感じるほど内容が充実していた」「当事者の話はとても勉強になった」等の好意的な感想が多かった。

\*参考資料：認知症フォーラムチラシ、「『認知症当事者の声から私たちが学ぶこと』アンケート集計結果」、「沼津朝日2017年3月30日記事」

**人員配置：**法人スタッフ約9名が会場設営、受付、会場誘導等を行った。

認知症の人と共に生きる地域づくりの実践をしている「富士宮モデル」の視察

H29.3.16	<p><b>参加対象者：</b>NPO法人スタッフ、中今沢結いの会メンバー、今沢地区社協、沼津社協、連携機関の方（コスモスクエアサービス、訪問看護ステーション春、母力.Pj、NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡）</p> <p><b>参加人数：</b>14名</p> <p><b>視察先：</b>黒田よりあいサロン（富士宮市黒田242）、木工房「いつでもゆめを」粟倉作業所（富士宮市粟倉2736-3）</p> <p><b>実施内容：</b>認知症の人を単なる支援の対象者として見るのではなく、認知症になっても安心して暮らせる地域を作ってくためのパートナーと位置づけ、認知症当事者、地域住民、行政とが協力して地域づくりを進めている「富士宮モデル」について理解し、沼津の地域づくりに活かしていくために、実際の現場の視察を行った。</p> <p>視察先は上記2か所。住民20人が自主的に認知症キャラバンメイトの資格を取得し、よりあいサロンのボランティアとして参加している「黒田よりあいサロン」の視察では、ボランティアの中心メンバーである外岡準司氏がよりあいサロンとして活動するまでの経緯について説明してくれ、その後、視察メンバー全員でサロンに参加させていただき、認知症の人と地域住民との実際の交流の場を共有させていただいた。特に印象的だったのは、特別なプログラムやイベントはせずに、とにかく認知症の人もそうでない人も一緒になってひたすら1時間近くお喋りをすることに徹している事であった。それが、スタッフに負担をかけずに、長く継続させていく秘訣だということであった。</p> <p>もうひとつの視察先の木工房「いつでもゆめを」は、男性の若年性認知症の方たちの就労の場となっていた。スタッフの助けをかりながら、車椅子用体重計やベンチを製作するための木工作業を若年性認知症の方が担い、営業活動も行っている。単なる支援を受けるだけではなく、自らが働き、賃金を得る場があることで、認知症になっても社会とのつながりや社会における役割を持ち続けることができ、それが若年性認知症本人の生きる意欲につながっている様子を目の当たりにすることができた。</p> <p>昼食時および往復のバス車内において、視察参加メンバー同士の交流も深まり、今後も互いに連携して、認知症や介護が必要になっても、安心して活き活きと暮らしていける地域を作っていくことを語り合った。また、来年度の本法人における活動の企画や運営に協力をいただけることも確認できた。</p> <p>*参考資料：「富士宮モデル」視察のスケジュール</p>
事業効果	<p>・「聞き書きワークショップ」について</p> <p>9月30日に実施した「聞き書きワークショップ」は、当初30名の定員で募集をしたが、予想を上回る参加希望が寄せられて、会場の収容人員の上限である37名で受付を締め切った。介護・医療職を中心に聞き書きへの関心の高さを感じた。施設の大規模化やリスク管理を優先させた運営で、スタッフと利用者の関係性が薄れて、そのことに焦りを感じる現場スタッフの不全感も、関心の高さに反映されていると思われる。個別性が尊重された介護からノルマをこなす作業に介護が変質すると、虐待や離職の温床に介護現場が変わってゆく。介護現場に本来あるべき人間性を取り戻すツールとして、聞き書きは大きな効果を持っている。「聞き書き」は民俗学研究者であり当法人の理事でもある六車由実が、介護民俗学の提唱と共に広めてきたものである。当初は1対1の聞き書きから始まって、それを文章化するとい</p>

う形で始まった。関心はあっても文章化するという作業が、聞き書きへのハードルと感じられるところもあった。その後徐々に発展して、「聞き書き双六」や「聞き書きカルタ」といった表現と結びついたツールに発展してきている。今回は「聞き書き」がもたらす効果と、誰もが気軽に参加できる「聞き書きカルタ」を中心にワークショップを行った。5～6人のグループで対話して、それぞれの思い出や地域の記憶をカルタにまとめて行く。その作業の中で個々の思い出や年長の人たちの地域の記憶が年代を越えて共有され、象徴的なカルタの文章に表現されていった。ワークショップを終えるころには、面識の無かった人たちがそれぞれを認め合い、別れ難い気分が自然発生的な交流会にまで発展した。その結果がアンケートにも反映され「講義とグループワークがあり、とてもわかりやすかった」「聞き書きからコミュニケーションが広がるのを感じた」等の評価が寄せられた。

1対1の聞き書きから発展して、誰もが取り組めるツールになった聞き書きを参加者の殆どが実感し、それぞれの職場で実践したいという声が聞かれ、実際に、現場や地域に帰って聞き書きを始めているという報告も何人かの参加者から受けている。介護や医療現場、そして地域がより豊かな人間性にあふれたフィールドになるように、深いコミュニケーションツールとしての「聞き書き」の普及に努めて行きたい。

#### ・認知症フォーラム「認知症当事者の声から私たちが学ぶこと」について

今は喧しいほどに認知症がクローズアップされている。認知症を題材にした映画やドラマが沢山作られ、マスコミに認知症の話題が取り上げられない日は無いほどである。その殆どは当事者を抜きにした視点や問題意識で扱われている。例えば保護者である家族が目を離れた隙に、認知症を発症した男性が線路に入り込んで列車に轢かれ、家族は多額の賠償金を鉄道会社から請求された等々。センセーショナルな事件や否定的な報道が、徐々に認知症とその発症者を社会悪として扱う風潮を助長しているように思えてならない。NPOユートピアはそのような風潮に疑問を感じて、認知症の当事者や当事者と向き合っただけで先進的な取り組みを行っている人たちの招いて、認知症になっても安心して暮せる地域社会を考えるフォーラムを企画した。

昨年のユマニチュード講演会に引き続き、認知症に対する関心は依然と高く、定員150名のところ186名の申込みがあり、当日は170名の参加者があった。また、ユマニチュード講演会の際は全国から参加者が殺到したのにもかかわらず、沼津市民および静岡県東部地区住民の割合は少なかったが、今回の認知症フォーラムでは、沼津市民と静岡県東部地区住民とを合わせると参加者全体の過半数以上を占めた。その理由としては、昨年の講演会を通じてできた沼津市内の他法人、介護事業所、医療関係機関とのネットワークによって参加の募集を行ったところ、各法人や事業所での認知症研修の一環として複数の職員が参加したケースが多かったことが、ひとつはあげられるだろう。本法人による講演会やフォーラムへの信頼感や期待が高いのだと言える。

また、もう一つの理由として、今回は、認知症フォーラムに向けて、認知症の方をめぐる介護・医療現場や知己での体験談やご意見を募集するために、周辺市町村の認知症家族会や沼津市内の社会福祉法人や介護・医療事業所、地域住民に、フォー

ラムの趣旨を面談によって説明し、賛同していただいた上でアンケートへの協力を求めたことも大きかったと言える。それによって、それまで認知症について他人事としてしか考えていなかった市民の中に、認知症を自分事として考える人が増えていき、認知症フォーラムへの関心も高まったのではないかと思われる。

当日参加者が書いたアンケートでも明らかのように、更に、フォーラムに参加することによって、参加者の当事者意識はかなり深まったようである。まず、レビー小体病当事者として講演された樋口直美氏が、アルツハイマー型認知症とは異なるレビー小体病やレビー小体型認知症の特徴を、自らの実体験に基づき、理路整然と、そして時にユーモアをもって雄弁に語るのを、多くの参加者は驚きをもって聞いていた。「認知症になったら何もわからない」という見方がいかに偏見に満ちたものであり、今まで認知症の本人に人として向き合っただけでなかったか、ということ、多くの参加者が感じたようである。

また、認知症の人とともに地域づくりをする「富士宮モデル」の仕掛け人である富士宮市役所の稲垣康次氏によって、認知症の本人と向き合うとはいかなることなのか、ということ、参加者は考えるきっかけとなったようである。行政や専門職、あるいは地域住民による一方的な支援ではなく、認知症の本人と人として対話し、共に作り上げていく基本姿勢がいかに重要であるのか、そのためにはみんなが当事者意識をもつことである、という稲垣氏の発言は、この地域で様々な立場で認知症の人たちとかわりをもっている参加者の今後の活動に大きな示唆を与えたのではないかとと思われる。

認知症専門医である笠間睦氏による、希望のある認知症の告知や、終末期医療における自己選択の重要性についての話や、あるいは後半のパネルディスカッションにおける体験談を基にした議論は、フォーラム参加者の中でも、とりわけ認知症の本人を介護する家族の方々に、これからの介護にあたっての具体的な方向性や希望を与えるものとなったようである。また、認知症の本人や介護する家族の抱える孤独感や絶望感を医療者の側からどうフォローするのか、そして、介護職や地域住民も協力し合って支え合うことの具体的なイメージを、参加者それぞれがもつきっかけになったのではないかとと思われる。

全体として、それぞれの分野で認知症についての先進的な実践をされている方々の示唆に富んだ意見が聞けたことは、沼津市や静岡県東部地区におけるこれからの認知症をめぐる様々な取組に対して多大な影響を与えたと言えるのではないだろうか。

#### ・「富士宮モデル」の視察について

認知症フォーラムで稲垣康次氏によって紹介された、認知症の人とともに生きる地域づくりの実践をしている「富士宮モデル」の実践事例について視察を行った。視察先、視察内容な事業内容に記した通りであり、認知症の本人を単なる支援の対象ではなく、共に地域や社会を作っていくパートナーとして関わるあり方を学ぶことができた。

今回の視察に参加したのは、中今沢結いの会、今沢地区社協、沼津社協、母力.Pj、NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡、コスモスケアサービス、訪問看護ステーション春であり、いずれも沼津の各地域で居場所づくりの活動をしたり、認知

	<p>症予防やケアを実践している方たちである。今回の「富士宮モデル」の視察は、それぞれの活動に少なからぬ影響を与えたと考えられるが、それとともに、参加者全員が認知症の方をめぐる地域の在り方についての目指す方向性を共有できたことによって、今後、互いに情報交換したり、協力し合いながら、認知症になっても安心して暮らしていける地域づくりを沼津市で実践していくためのネットワークの構築へと一歩前進したように思う。</p>
<p>今後の活動予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="424 443 847 472"> <p>・ <b>ユマニチュード入門研修について</b></p> <p>事業内容で説明したように、ユマニチュード入門研修は参加人員の規定や実施予定の調整等で断念せざるを得なかった。福岡市はユマニチュードを高く評価して市を挙げて研修を奨励し、導入による効果を検証するプロジェクトを立ち上げている。その他多くの団体や個人、市町といった行政機関も関心を持ち、ユマニチュードの研修をエージェントに申し込んでいる。沼津市の介護・医療の専門職からも研修に参加したいという要望が、当法人にも多数寄せられているので、今後も沼津市での研修の実現に努力してゆきたい。</p> </li> <li data-bbox="424 875 1086 904"> <p>・ <b>中今沢における住み開きによる居場所づくりについて</b></p> <p>事業内容でも説明したように、当初、中今沢地区で結いの会と連携して、空家を活用した「地域の高齢者が安心して暮らしていける場」を作ることを目指していたが、空家の活用については権利関係や家賃、所有者の理解等様々なハードルがあり、なかなか実施は難しいことがわかってきた。その一方で、中今沢結いの会からは、そのメンバーでもある独居高齢者である稲葉氏の自宅で使っていない1階と3階を利用して居場所づくりができないか、という提案があった。稲葉氏の自宅は、中今沢公民館に隣接しており、中今沢地域住民の寄り合う場としては立地もよく、また稲葉氏本人も家族も、本人が今まで通り居住できるのであれば、地域住民の居場所として是非活用してほしいという希望も持っている。そのため、今後は、稲葉邸を住み開きの形で、地域の居場所として活用できるかどうか、構造面や資金面などを含め具体的に検討をしていく予定である。</p> </li> <li data-bbox="424 1496 1445 1576"> <p>・ <b>認知症になっても、介護が必要になっても、安心して豊かに暮らしていける地域を作るための勉強会について</b></p> <p>本年度は、地域の高齢者が安心して暮らしていける場をみんなで考え作っていく事業として、聞き書きワークショップや、認知症当事者や認知症ケアに関わる方々を招いて認知症フォーラムを開催した。多くの参加者からは、継続的に講演会やフォーラムに参加したいという希望をいただいていることもあり、今後も認知症や介護についての講演会等を企画し、運営していきたいと考えている。その一方で、それらの講演会が単なるイベントに終わらず、認知症になっても、介護が必要になっても、安心して豊かに暮らしていける地域を作っていくための継続的な実践に結びつくように、法人事務局のある中今沢地区において、本年度も連携してきた結いの会のメンバーや、他の地域住民を対象とした20～30人規模の認知症やケアについての勉強会を年に数回開催したいと考えている。</p> </li> </ul>



自己評価	<p>事業計画で予定していたユマニチュード入門コースの沼津研修会や、空家を活用した居場所づくりについては本年度実施することはできなかったが、聞き書きワークショップや認知症フォーラム、「富士宮モデル」の視察は、予定を上回る多くの参加者があったとともに、その反響も大きなものがあったと実感している。また、これらの事業の実施を通して、様々な組織や人とのネットワークも更に構築でき、それが今後の活動の支えになっていくことが予想される。そのような点でも、本年度の事業は概ね評価できる成果をあげられたのではないかと思っている。</p>
------	---